

生存科学研究ニュース

VOL. 15. NO. 5 2000. 9. 10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3563-3518 FAX 03-3567-3608

中・長期基構想委員会報告

生存科学研究所活動の基本である事業計画のあり方を、中・長期的に検討し、それに基づいて各年度の計画の適正な進行に役立てるために、基本構想委員会が設けられている。

メンバーは理事長、副理事長、専務理事および常務理事のうちの担当者の計4名で構成されており、委員会が下記のとおり開催された。

8月10日(木) 午後2時～4時

議題 (1) 金融資産の最近の運用状況について

(2) 会員の安定的確保について

(3) 生存科学研究の広報活動について

9月7日(木) 午後2時～4時

議題 (1) 研究所財政収支の長期見通しについて

(2) 受託事業の積極的開拓について

(3) 来年2月の役員選挙の進め方について

(4) 事務体制の一層の円滑化について

いずれの議題も、新しい世紀を迎えて、益々その使命が重要になる研究所活動の基盤を支える組織と財源、および研究活動の社会的貢献に関わることであり、活発な議論が行われた。

平成12年度第1回生存学研究会 研究討論会報告

平成12年8月26日、27日の二日にわたって表記研究会が開催された。今回は「山川草木の治療」のテーマにふさわしく、加賀平野や白山を臨む、円行山頂上の“生雲”で行われた。ここは古代山岳信仰の跡地にあり、白山の古代信仰の儀式等を再現し、人々の日常のストレスを森や山の自然に触れてリフレッシュしてもらおうとする施設である。

まず、世話人のト部文麿氏(仙齡会理事)より、この施設を選んだ経緯や、アニミズム・Spiritualism・日本伝統文化の問題につき、講師のレクチャー以外に、相互意見交換をしようとの提言で始まった。

日高敏隆氏(滋賀県立大学学長)はドーキンスの話为例に、博物学的な視野に立って、

遺伝子を調べればすべてが分かるとか、心は遺伝子を超えるとかいうような両極端の意見には無理があり、「生命とは何ぞや」を論ずる前に、「生物とは何ぞや」を探究することが必要だとされた。生物は限りある命を持っている。多くの遺伝子の集団（プログラム）が生命体を作り、子孫をつくり、種を残し、有限に対抗している。遺伝的プログラムにより学習することもあるが、あたかもシナリオを演ずるようなもので、個々の演出表現により効果が異なる。プログラムですべて決定されるものではない。従って、亡びもすれば存在することもあり、われわれの将来は教育、環境、人の智による取り組みが必要とされた、と述べた。

上田哲行氏（石川県農業短期大学）はトンボの研究から視野を広げ、ユニークな話を展開された。本能的なことはDNA情報として説明できるとしても、遺伝子で全てを判断することは不可能である。4歳まで増えつづける神経細胞が、その後減少することを考えると、その後は社会の枠で決まっていくと考えられる。日本人は古代、国土を秋津（トンボ）島といったように、自然との関わりが深く、トンボ研究者らしく、里山の自然環境の大切さと、生命あるものとの共生を訴えられた。

木崎馨山氏（那谷寺住職）は、私たちの生存世界は努力で成就しない矛盾で満ちている。因果律は永いスパンで考えなければならない。次の世への生命活動が学習されながら移行する。人の眼耳鼻舌身、意識、未那識は

経験により匂いづけされ、阿頼耶識という無意識に統合される。アニミズムでは動植物全てにその識があって、魂や霊として存在しているので、全てが大切にされ自然も大切にされる。あらゆる生命は大河の流れのようであると述べた。

ト部氏は、北陸の山林の多様性と、手入れの行き届いた山林にふれ、緑の保全を訴え、広島原爆・阪神大震災で多くの死を見た自らの体験から、死を考えることは生を考え、自らよりよく生きることと説き、山川草木、すなわち植物が生命の根源であると強調された。

参加され嶋多氏、駒田氏からも、遺伝子、生命、昆虫、自然等についてそれぞれの思いが語られ、質問応答を交えながら、4時間にわたる討論会を終えた。（木崎馨山）

第9回銀座ナイトセミナー
「生きる」シリーズ報告

2000年8月31日（木）18:00より、東京医科歯科大学医学部前教授の古川哲雄氏を招いて、「神経内科学者の『生きる』」が開かれた。古川氏は、「脳死状態になっても患者に意識が残っている場合のあることは、間違いない。臓器を摘出される際に、脳死患者は痛いと感じているのではないか」と主張され、脳死患者からの臓器摘出について警鐘をならされた。

古川氏が「脳死患者にも意識があるのでは」と思いついたのは、約10年前のこと。フランスの哲学者アンリ・ベルグソンが、「脳がないから動物に意識がないとするのは、胃

がないから養分が取れないというのと同様に愚かしいことである」と説いているのに出会ったのがきっかけだったという。

脳がない動物を作る実験は19世紀末からたくさん行なわれており、ドイツの医師ゴルツは1892年に、犬の脳を完全に除去しても長期に亘って生存可能なことを確かめている。そして彼は、自分で食べたり飲んだりできる除脳犬が取る行動について、単なる反射では片づけられないのではと強く感じていた、と言う。

除脳動物に共通の傾向として、外界からのインプットはあるものの、自分から外へのアウトプットができなくなる、ということが言える。古川氏は、脳死患者も、この一種の「閉じこめ症候群」が起きているのではないかと推察する。

動物実験ばかりでなく、通常の脳波がフラットになった患者であっても脳室内に電極をいれると活発な活動波が見られることが、船橋市立医療センターの唐沢秀治脳神経外科部長らの研究で分かっている。また同様に、脳死患者の鼻腔に電極を挿入すると脳幹由来と思われる脳波が検出されることも、関西医科大学法医学の沖井裕氏らの研究で確かめられている。さらにドイツのビッチェルらの報告では、臓器摘出をするため脳死患者の体にメスをいれると、患者の血圧が急に上昇し、脈も速まることが観察されている。これは、末梢の反射というだけでは説明しがたい、と古川氏はいう。

さらに日本でも米国でも、脳死患者から臓

器摘出する際には、患者に麻酔をかけたり、モルヒネを使っているという。脳死患者が本当に死んでいるのなら、なぜ死体に麻酔をしたり、モルヒネを使ったりするのだろうか？

古川氏は、所論をまとめ、日本神経学会総会に昨年と今年と2度演題提出しているが、2回とも不採用にされたという。特に、昨年は、応募してきた論文の中での唯一の不採用だったという。不採用に納得できなかった古川教授は、学会会長にその理由を尋ねたところ、「論文の内容が思弁的で、学会のスキームの外にある。それにこの問題はすでに決着済みである」というのが、返事だった。

しかし、同様の内容の論文は、国際生命倫理学会では採用され、筑波で開かれた国際フォーラムでは、フォーラムの方から論文を提出してくれと頼まれたと言う。

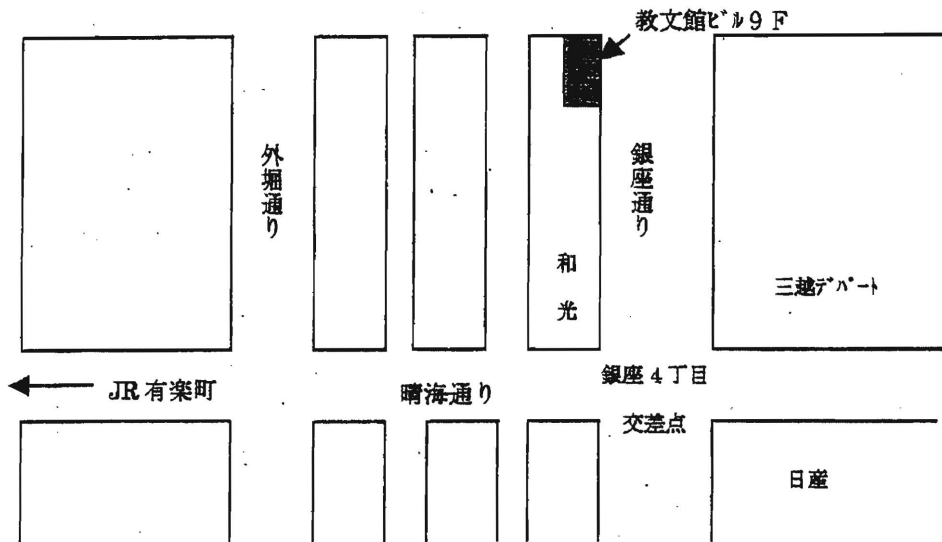
古川氏の主張内容が正しいかどうかは別にしても、発表の場すら与えないというのは、医学会が自由に開かれたアカデミックの場とはとても言えない。やっとな法律もでき、社会的にスタートした脳死移植に対し、今更反旗を掲げるような発表を許してしまうと、医学会内部や社会から何を言われるか分からない、という政治的な意図が働いたとしか思えないような措置である。

古川氏の話を受けて、「いや、日本の学会なんてもんは、所詮どうしようもないものだから」と、いつもの持論を展開される高橋 暁正氏に、出席者一同、頷かざるを得なかった。(津谷喜一郎/久保田裕)

平成12年度 生存科学講座のご案内

今年度は《ひと・つながり・21》をメインテーマに「長寿社会をどう切り拓くか」について考えます。同封のチラシをご覧のうえ、お誘い合せて、多数ご参加下さい。

参加希望のかたは、はがき又はファクスで、お申込みください（9月28日必着）。
会場案内図（生存科学研究所隣接ビル：地下鉄銀座駅A9出口徒歩3分、JR有楽町駅徒歩8分）



学術誌「生存科学」
原稿募集について

学術誌「生存科学」は巻を重ね、7月下旬にはVol. 11, Ser. A を発行いたしました。編集委員会では、現在Vol.12, Ser. A への投稿を募っております。

ご承知のように、Ser. A は生存に関するさまざまな問題についての所感・提案・提言等を自由に述べる場を提供することを目指しておりますので、日頃のお考え、ご意見、また、生存科学に関係する図書の書評など、ぜひご投稿ください。

投稿規定は学術誌「生存科学」Ser. A の「投稿のご案内及び規定」に掲載してあります。ご不明の点は事務局にお問い合わせ下さい。会員の皆様の投稿をお待ちしています。

会員寄贈図書

薬の歴史・開発・使用



津谷喜一郎
仙波 純一 編著
2000年3月20日発行
発行所
財団法人
放送大学教育振興会
定価2,000円+税

研究所日報

- 7月21日（金）編集小委員会
- 8月10日（木）中長期自主研究基本構想委員会
- 8月26日（土）27日（日）
生存学研究会（於：小松）
「山川草木の治療-具体的実践計画」
- 8月31日（木）銀座ナイトセミナー
- 9月7日（木）中長期自主研究基本構想委員会